書き下ろし——6

新本格推理小説全集

松本清張 責任監修・解説

公園には誰もいない

結城昌治

園には誰もいない ■ 結城昌治 ■ 読売新聞社

書き下ろし・新本格推理小説全集6
公園(こうえん)には誰(だれ)もいない
定価三八〇円
昭和四十二年三月二十日　第一刷
著者　結城昌治(ゆうきしょうじ)
発行者　鈴木敏夫
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　寿製本株式会社
発行所　読売新聞社
東京都中央区銀座西三の一
大阪市北区野崎町七七
北九州市小倉区中津口七三の二五

©, SHŌJI YŪKI, 1967

公園には誰もいない ■ 結城昌治 ■ 読売新聞社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

新本格推理小説に寄せて

松本清張

推理小説は昭和三十四、五年から爆発的な流行をみせた。これは、その少し前から海外の推理小説の翻訳ものが読者に迎えられていたことも下地になっていたのだが、それまでの普通の小説が、とかく、単調、難渋、平板に陥っていたことにもいくらか関係があるのであろう。読者は面白い小説に飢えていたともいえる。以前から推理小説の読者は知識人だったが、今度は同時に、新しく婦人層をも加えた。

その期の推理小説を考えると、傾向的には社会派、風俗派に分けられ、社会派を細分すれば、組織を主体とした、たとえば政、財界の内幕的なものや、汚職事件などがとりあげられ、また個人生活と組織とのつながりも題材となった。これは、文壇で組織と人間とが論じられたところに大体一致する。

風俗派のそれは当然に市井の暗黒面や恋愛、愛欲の姿が材料になった。アメリカのハードボイルドを下敷にしたものは街の暗黒面を描くのに役立ったし、男女の愛を描写するに

も推理小説的手法が在来の平板な小説より新鮮味を与えた。

こうしてみると、推理小説はあらゆる小説の題材分野を吸収していたことになる。その分野によって個別化していたそれまでの普通の小説題材を推理小説は綜合結集したともいえる。それから、その描写にしても、何となくはじまって何となく終るというような普通の小説と違って、とにかく設計された構成が存在していた。普通の小説だと、書きながら途中でいくらでも構想が変えられるが、推理小説ではそうはゆかない。伏線を縦横に引き、その伏線を最後に全部生かして一つの焦点に方向集中しなければならないからである。推理小説の読者は、伏線を絶えず気にしているのだ。

ジャーナリズムは読者の傾向に常に敏感である。当時の推理小説ブームの半分はジャーナリズムがつくったようなものである。雑誌「宝石」を編集していた江戸川乱歩が普通の小説作家に推理小説を依頼して回ったことなどもあって、途中からこの分野に参加する作家、新人群の出現など、推理小説は満開のお花畑の観を呈した。文壇小説さえ推理小説的手法を用いるのが流行した。

しかし、正直にいって、この時期に推理小説はその本来のあるべき性格を失いつつあった。その理由の一つは題材主義に倚りかかりすぎたためであり、一つはジャーナリズムが多作品を要求したため不適格な作品が推理小説の名において横行したことであり、もう一

つは、その結果、推理作家自体の衰弱を来したことである。これは反省すべきことであった。推理小説本来の興味は、アラン・ボウのジュバンもの以来、「謎」が伝統であった。「知恵の闘い」（木々高太郎説）なのである。その意味では佳作がそうむやみと出るはずはなく、昭和三十四、五年から数年までのブームは空洞だったともいえる。あれは当時のジャーナリズムが半分ふくらました幻のブームで、現在の状態が普通である。いまさらジャーナリズムが「ブームの衰退」を云うのはおかしい。

今や推理小説は本来の性格にかえらなければならない。社会派、風俗派はその得た場所に独立すべきである。本格は本格に還れ、である。

しかし、ここまできた推理小説の形式・内容が、戦前のそれにもどるべくもない。社会派・風俗派の通過は、ある意味において推理小説の視野をひろげ、対象を掘り下げ、程度を高めたことである。技術も前進させたと思っている。現時点で本格ものに還るということは、以上の基礎に立ったものであり、それからの新しい発展である。その意味で、わたしはさきに「ネオ・本格」という言葉を口走ったけれど、このシリーズでは「新本格推理小説」となっている。

およそ文学上の一つの発展には、作家によるグループ的な活動が必要である。それには有能な作家の参加が不可欠なことはいうまでもない。

幸いに読売新聞社がこの趣旨に副って新企画を打出した。いくら文学運動だといっても与えられる場がなければ手も足も出ない。わたしたちは欣然としてこの企画に参加することになった。執筆陣はこの書き下ろしに異常な情熱を燃やしている。推理小説本来の姿は、雑誌に輪切りにして発表される連載ものではなく、書き下ろしの封切版にある。本格ものはそうでなければならぬ。読者は、雑誌の上では一字もお目にかからなかった書き下ろし小説を、心ゆくまで愉しまれるに違いない。

わたしは、執筆者諸氏より年齢的にいささか先輩である故に、監修という役目をつとめることになった。その選択はわたしの責任による。顔ぶれにおいて、間違いない作家ばかりである。しかし、もちろん、ほかにすぐれた作家もあることだし、もし、第二の企画があればぜひ次の陣列に加ってもらうことにする。

各作家の傾向についての解説は各巻でわたしが担当するが、なにしろ、封切版だからわたしもゲラ刷をよむのがたのしみである。ただ、監修の責任上、各作品については前もって大体の構想について作家から聞いて意見も出している。ゲラを読んでも不審な点はダメを出して、読者への責を果すつもりである。

公園には誰もいない

装丁　重原保男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

岡田弁護士に聞くまで、わたしは中西伶子の名を知らなかった。

しかしシャンソン界に不案内のわたしが、彼女を知らなかったのは当然だろう。歌手といってもまだ卵のようだ。二十二歳、失踪当夜は銀座のシャンソン喫茶「アルカザール」で歌っていたという。

父の敬一郎はもと子爵で外交官をしていたが、数年前に退官して現在は肺結核のため入院している。

「矢野三保子という映画女優を憶えてるかね」

岡田弁護士が訊いた。

「……」

すぐには思い出せなかった。遠い記憶だった。スクリーンから消えて二十年以上経つのではない

か。時代劇の衣裳をつけた記憶がおぼろげに残っている。多分お姫様のような役だったろう。
「きみの年代では憶えていないかも知れんな。人気があったのは戦時中だ。若手の外交官だった中西氏と結婚して俳優をやめたが、もう四十七歳になる」
「それが伶子さんの母親ですか」
「そうだ。パリで生んだが、戦後間もなく引揚げてきた」
「退官してから病気になるまで、中西氏は何をしていたのでしょう」
「好きな絵を集めたり手放したりしていたようだ。二年ほど前にユトリロの贋物をつかまされた事件があって、わたしはそのときの訴訟で中西夫妻を知った。失踪した娘に会ったことはない」
伶子の失踪は四日前だが、入院中の敬一郎には心配させぬため知らせてないという。それで三保子が岡田弁護士に相談したのである。
「家族はその三人ですか」
「二つ年下の次女がいる。絵を習っているそうだが、家事は殆ど次女がみているらしい」
次女の名は理江、女中はいない。
わたしは調査を引受けることにした。正式には三保子に会って依頼を受けることになる。徹夜つづきの仕事を片づけたあとで、二、三日休養したいところだが、わたしの職業はそんな贅沢を言っていられなかった。個人営業の私立探偵は野良犬のように首輪さえはめていない。僅かな信用を元手に弁護士と契約して、刑事事件や民事事件の証拠資料の蒐集を主な仕事にしているが、それら

に付随してさまざまな調査依頼も舞込んでくる。しかしいったん仕事が途切れると、タクシーのように町を流していれば客が手をあげてくれるという稼業(かぎょう)ではなかった。

2

有栖川宮記念公園の石塀に沿って南部坂を上ると、左手が区営の運動場で、右手の一帯は静かな住宅地だった。

運動場の柵際に車を駐めた。

指定された時刻より五分ほど早かった。

どこかでピアノの音が聞えていたが、すぐにやんだ。

中西家は薔薇の生垣に囲まれていた。花の色は赤ばかりだった。その華やかな色彩と対照的に、古風な二階建の洋館は暗く沈んで見えた。

石の門は鉄の扉で閉ざされていた。

門の内側に、大きな犬が寝そべっていた。この家と同じように老いた犬だ。物憂そうにわたしを眺めたが、吠えもしないし尾を振りもしなかった。

インターフォンのボタンを押した。
「はい」
女の声が返った。
「真木といいます。岡田弁護士の紹介できました」
「どんなご用でしょうか」
「おくさまが岡田さんからお聞きと思います。お訪ねするように言われました」
「――」
玄関のドアが開いて、若い女が現れた。ボーイッシュな髪のせいか、子供っぽい感じだった。
「母は出かけておりますけど」
彼女は扉越しに言った。化粧は全くしていない。唇がかぶれたように荒れていたが、顔立ちは整っている。ただし目立つ美しさではなく、例えば葉群に隠れがちな紫陽花のように寂しい。潔癖そうな澄んだ眼をして、肌は浅黒かった。
「いつ頃お帰りになりますか」
「父を見舞いに行きましたが、もう戻ると思います」
「お待ちしてよろしいでしょうか」
扉の隙間から、わたしは岡田弁護士の紹介状を渡した。名刺の裏に、わたしが、信頼できる私立探偵である旨を走り書きした紹介状だった。

「伶子さんのことで、おくさまが岡田さんにご相談されたのです」
わたしは、怪訝そうに紹介状を読んでいる彼女に言った。
かつて、わたしの職業が好意をもって迎えられたことは一度もなかった。
しかし、彼女はすぐに事情を理解したようだった。
老いた犬が大儀そうに大きな体を起こした。
門扉は内側に開いた。
両側の植込みも赤い薔薇ばかりだった。
重そうな樫材の玄関ドアには、真鍮のノッカーがついていた。
暖炉のある応接間へ通された。
分厚い絨毯を敷きつめた応接間の、壁に据えつけた本棚は画集が多く、他の一方の壁には印象派風の油絵がかかっていた。作者のサインは読取れない。よく鞣された革張りのソファはどっしりして、かなり年代を経ているようだった。窓があいているのに、空気が湿っぽく淀んでいる。
「失礼ですが――」わたしは立去ろうとする彼女に言った。「理江さんですか」
「はい」
彼女は無表情に頷いた。
「大体のことは岡田さんに伺いましたが、その後、伶子さんから連絡はありませんか」
「はい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c